

「音楽語り」の自由とムダ

桃山学院大学社会学部 准教授
長崎 励朗

「音楽語り」は実際には何を語っているのか？

音楽について言葉で語るのは野暮である。そんな意見を聞くことがある。要は言葉でいくら語っても音楽自体については語りつくせないのだから、スマホの音量でもあげて相手の耳元に持っていくのが一番というわけだ。

たしかに、音楽の内容について語るのは難しい。あのピアノのフレーズがどうか、ギターの音が良いとか、そういう話はとても楽しいが、基本的に聴いた者同士の間でしか成立しないからだ。当然、それは知っていることの確認でしかないので、新情報はほとんどゼロ。すぐにネタは尽きてしまう。仮に純粋に音楽の内容だけについて語るという縛りをかければ、膨大な音楽を聴いている人間同士でしか会話を続けることはできなくなってしまうだろう。

また、もし仮に音楽を知っている人が知らない人に内容を語る場合はさらに厄介で、独りよがりな演説にならないためには、紹介する側がよほどの話し上手であるか、そうでなければそれこそスマホの出番となる。そしてスマホで聞いたあとは、やはり前述の聴いた者同士の会話になるほかない。

では内容以外に音楽について語る方法はあるのだろうか。もちろんある。それは音楽の関係性について語ることだ。ピエール・バイヤールという文学者が書いたユニークな本がある。『読んでいない本について堂々と語る方法』という刺激的なタイトルの本で、そもそも文学作品を論じる文学者たちが、実は大半の本をちゃんと読んでいないという告白からはじまる。内容を知らなくても語るができるというこのスタンスは、音楽にも応用できるのではないか。詳しく見てみよう。

バイヤールはある小説に登場する不思議な司書のエピソードを引用している。ある人物に書物の案内を頼まれた司書は、ここの本を全部読んでいるのかと聞かれ、全く読んでいないと答える。むしろ本の全体像を知るために内容は邪魔なのだ、と。バイヤールはこのエピソードを引きながら、実は本について語れるとは、本と本の間を知っていることなのだと説明する^(注1)。例えば、Aという本はBという本と対立関係にあり、CはAとBの両方の意見をとりいれた本、Dはそもそもそれらの論争の枠組み自体を批判して新境地を開いた本というように。

これはそのまま音楽についても言える。音楽について語る時、内容についてよりもミュージシャン同士の関係や音楽シーンの流れなどの方が語れる要素ははるかに多く、かつ話題も広がり

やすいのではないか。AというバンドはBから影響を受けていて、BとCはドラムが同じ。DはABCが作った音楽シーンのリバイバルで、Eはそれとよく似ているけれど、別のシーンからの影響もみられる…という風に。そして実のところ、こうした会話は必ずしもこれら全てのミュージシャンを大して聴いていなくても、成立してしまう。つまり、音楽について語ることは関係性を語ることだと割り切ってしまうと、さほど難しいものではないのである。

こうした認識は音楽語り、もっと言えば人生をさらに豊かにしてくれる可能性も持っている。二点ほど指摘しておきたい。第一に、それは音楽を飛び越えて映画、漫画、アニメ、ファッション、文学、スポーツなどあらゆる方面の文化へと興味を広げるきっかけになる。あるミュージシャンがBGMに用いられている映画を掘るもよし、特定のジャンルと強く結びついたファッションを身に着けるのもよし。音楽を飛び出して、その人の趣味はさらに立体感を増していくことだろう。第二に、それは自分を知り、自分を語ることにつながる。というのも、音楽の内容は変えようがないが、音楽同士、あるいは第一の点で見たような音楽とその他の文化をどう関係づけるかは自由だからだ。何も歴史的に正しいとされている文脈ばかりが関係性ではない。一般的には無関係だと思われている音楽が自分にとってはとてもよく似ていることもある。音を詰め込む系、音が軽い系、ホラーっぽい音楽などと独自のジャンルを作ってもいいかもしれない。音楽にも正史とされるような定番の歴史があるのはまちがいないが、同時に歴史や系統、文脈の語り方自体は自由である。そうやって、好きなものをつないでいくと、点と点が線になり、自らも意識していなかった自分の好みや、大切に思っているものが浮かび上がってくるはずだ。

音楽語りとは、音楽の内容そのものだけではなく、関係性を語るものであり、それが自分を語ることもつながっている。こうした認識を持てば、音楽語りははるかに自由で楽しい営みになるのではないだろうか。

インターネット時代の落とし穴—効率性が奪うもの

実は、そうした音楽語りは昔からおこなわれてきた。かつて筆者は日本で最も販売部数の多い音楽雑誌『ロッキング・オン』の初期を研究したことがある。当時はプロのライターではなく、音楽について文章を書きたい人々による投稿雑誌だった。中身を読んで最初に気付いたのは、音楽の内容に関する投稿が驚くほど少ないということだ。雑誌自体は「ロック・ジャーナリズム」を標榜していたのだが、そこに掲載されていたのは、SFの話だったり、学校が嫌いだという話であつたりと、音楽とほんの少ししか接点のない記事ばかり。しかし、当時の彼らはそうした自己表現の場を心から必要としていた。記事と記事でコミュニケーションをとったり、あるいは雑誌をきっかけに直接話す仲間を増やしたりしていたのである^(注2)。

ただ、今は時代も変わり、情報はインターネットで検索できるし、わざわざ雑誌に投稿などしなくてもSNSですぐに発信もできる。こうしたメディア環境の変化は「音楽語り」にどんな影響をもたらしたのだろうか。情報を得やすくなったし、発信もしやすくなったのは間違いない。単純に考えれば音楽語りにとって良い環境になったとも言える。しかし、それと引き換えに、デジタル化以後、我々はいくつかのものを失っている、正確には見失いがちになっているのではない

か。以下、その処方箋とともに考えてみたい。

まず、情報の入手が容易になったことで失われたものを考えてみよう。それは第一に音楽に勝手な想像を書き込む自由だ。前述のように、音楽を何とどう関係づけるかは自分次第である。実はこの作業にはある程度情報の空白があった方が都合がいい。

「このミュージシャンはどう考えていたのだろうか。もしかしたら、こんなことを考えていたのかも。そうか、だからこの音楽とこの音楽は似ているのか。」

そんな風に勝手な想像をめぐらしながら自分なりのストーリーを組み上げていく楽しみは格別だ。しかし、情報があまりに多いと、正解が分かる反面、勝手なストーリーを書き込む余地がどうしても小さくなってしまう。

とはいえ、情報が手に入りやすくなったこと自体は悪いことではないし、情報量の増加は歓迎すべきことには違いない。しかし、以下の変化はそれすらも掘り崩してしまう可能性を持っている。インターネットによる情報取得が奪った第二のものは、個人の中の多様性である。たしかに、インターネットは検索可能な情報の幅を大きく広げた。今やアメリカの小さな田舎街のインディーズバンドのライブすら閲覧できる。しかし、検索できるということと、実際に検索することとは違う。知らないものは探せないのだ。試みにスマホで Spotify や Apple Music、YouTube といったアプリを立ち上げてみてほしい。「あなたへのおすすめ」が並んではいないだろうか。筆者も経験があるが、あれは結構あたる。少なくとも直前に聴いていた音楽からの推測はかなりの確である。しかし、当たってれば当たっているほど、「あなたへのおすすめ」は使用者の好みを狭めてしまうとは言えないだろうか。もちろん、未知のジャンルを開拓する時にはとても重宝するが、基本的に未知のジャンルには飛んでくれない。これまでの聴取傾向に合わせたものが表示されるからだ。「あなたへのおすすめ」は偶然の出会いを許さない。ネットは多様性に満ち溢れているにもかかわらず、個人の中の多様性は失われがちであることは意識しておくべきである。

一方、発信が容易になったことによって失われたものは何だろうか。それは個人として音楽と接する自由だ。多く的人是は炎上するほどの知名度はない。しかし、SNS 上でのコミュニケーション全般に言えることだが、そこには必ずオーディエンスがいる。ほとんど人は見ていないかもしれないが、見られている可能性も捨てきれない。そんなとき、人は他者の眼を内面化する。誰かから間違いを指摘されれば、人からバカにされているのではないかと考えるだろう。他者と意見が食い違った時には勝ち負けが気になってしまうに違いない。つまり、誰かに見られていると感じると、人は間違いが怖くなるし、意地をはる。だから、本当は間違えていても、自分の勝手な想像でもいいのに、音楽を語るには大量の正しい情報が必要だと思ってしまう。発信が容易になったことと、個人の勝手な想像が許されないという思い込みは連動しているのだ。

物理的空間—ネット時代のワイルドサイド

これらに処方箋はあるだろうか。それを 1 つ挙げるとすれば、物理的空間の重要性を見直すことだ。誤解のないように先に言っておくと、それはネットを捨てよという話ではない。今まで通りネットは使えばいい。ただ、その一方で、新しい音楽を発見する場所も、音楽について語る場

所も決してネットに限定されたものではないことを思い出してほしいという程度の話だ。

先にあげたネットの持つ欠点のうち、一点目と三点目に指摘した問題にひきつけて言うと、オーディエンスのいない物理的空間で友人と話す時、人はずっと自由だ。適当な想像で話してもいいし、間違っただけを言ってもいい。意見が違ったら違っただけで、勝ち負けにこだわる必要もない。当然、情報不足でもいいし、正しくなくても構わない。個人として考え、互いに雑音のない個人としてコミュニケーションを交わすことができる。

また、二点目にあげた個人の多様性の問題についていえば、物理的空間は偶然に満ち溢れている。レコードショップ（媒体は CD でもなんでもいいが）でジャケットを見て買う。あるいは店員さんがたまたまかけていた曲を気に入って買う。同じ店でよく会う人と友達になる。その友人からまた音楽を教えてもらう。そんな偶然はきっと個人の中に多様性をもたらしてくれるだろう。

こうした物理的空間での楽しみは非効率に見えるだろうか。確かにそうだ。近年はコスパにくわえて、タイパという言葉まで生まれてきた。金銭のみならず、時間もコスト計算に加えられたということだろう。だから無駄なく効率的に好きな音楽にたどり着ければそれに越したことはないという考えが生まれる。「あなたへのおすすめ」のようなシステムが生まれてきたのも、そうした人々の欲望の結果だろう。しかし、趣味とは、つまるところ、ムダなのだ。「No Music No Life」なんてとんでもない。もし本当にそうだとすれば、音楽は趣味ではなく、酸素みたいなものだ。酸素を趣味にしている人間はいない。音楽がなくても生きていける。だからこそ、前述のように、自分をそこで発見したり、語ったりと個性を映すものになる。効率性を重視するあまりネットに囚われることは、自分を自分たらしめているムダを失うことだ。それはそもそも趣味の、ある側面を無意味化する行為だとは言えないだろうか。

AI の発達が目覚ましい今日、何事も効率的になったのは喜ばしい。だが、効率的なことだけをするのは舗装された大きな道路の上をひたすら歩くようなものだ。レコメンドシステムなどはまさにそうで、そこには個性も何もない。みな、同じ道の上を歩いている。趣味の世界ぐらい脇道にそれて、ワイルドサイドを歩いてみてもいいのではないだろうか。

参考・引用文献

1. ビエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』（大浦康介訳）、筑摩書房、2016年。
2. 長崎励朗『偏愛的ポピュラー音楽の知識社会学—楽しい音楽の語り方』、創元社、2021年。